

明星教育センター開設10周年と今後に向けて

同志社大学社会学部 教授 山田 礼子

この度、明星教育センター開設10周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。貴学センターは2010年4月に創設されて以来、大学の創立者である児玉九十氏の教育理念をベースにした明星教育についての研究のみならずその理念を教育実践に取り入れる活動の司令塔として実践を推進されてこられました。

設立10周年記念として「明星教育の実践をめざして——明星教育センターのあゆみ——展について」という資料をこの度送付いただきました。その資料を参照させていただきますと、「自立と体験1」「自立と体験2」・「自立と体験3A」「自立と体験3B」「キャリアデザインA」「キャリアデザインB」という名称の授業に明星教育の特長ともいえる体験教育が反映されていることがよくわかります。

2010年度より、全学共通教育科目として「自立と体験1」が開始され、2012年には、自立と体験2」・「自立と体験3」「自立と体験4」が同様に全学共通教育科目として開始されています。2015年度には、全学共通社会的・職業的自立促進科目として「キャリアデザイン1」が、2016年度には「キャリアデザイン2」が開始されました。これらの科目は、全学共通科目としての位置づけであることから、組織的に推進されており、その教育目標も全学で共有されているということが明らかです。

2019年度には、これらの科目をそれまでの教育成果を検証し、現在提供されている科目名へと変更がなされています。

私は本センターが設置される以前の2009年に、貴学におきまして「初年次教育」に関するお話をさせていただく機会をいただきました。当時は、初年次教育が全国で普及しつつあり、拡大していく時期でもありましたが、まだ全学で初年次教育を組織的に提供している大学はそれほど多くはないという時代でもありました。そこで、当時設立されて間もない初年次教育学会がなぜ設立されたかを振り返りながら、初年次教育の意味そして組織的に全学横断で推進していくことの意義をお話させていただいたように記憶しております。

国立大学等では、学部ではなく大学教育に関するFDやキャリア教育、初年次教育を担うセンターが設置され、そこに定員がついていることから、センター所属の先生方が初年次教育やFDを担うことが多いという特徴があります。一方、私立大学では、定員がセンターにないことも多く、学部の先生方が設置されているセンターに委員として参加あるいは兼担するということが一般的です。私の大学にも教育開発センター（現在は学習支援・教育開発センター）が2004年に設置され、初年次教育を推進する施策の拠点となっておりましたが、あくまでも大学の各学部から部会に代表の先生方が部会委員として参加され、そこで決められた施策等は各学部で推進していくような分散型の組織でありました。したがって、初年次教育（当時は導入教育と呼称）のモデルも作られていましたが、その内容は各学部の実情や専門科目との関連からプログラムが構築されて、実践されておりました。その意味では、各学部主導で初年次教育が推進され、全学での学部横断型での初年次教育の推進とは異なる形での初年次教育プログラムの構築であったと思います。同様に、多くの私立大学も初年次教育を導入するところが多くありましたが、学部主導型で推進されていたように思います。

その後、貴学は、2010年にセンターを設置され、先述したような科目を学部横断型で全学に提供されてきました。2020年度では、センターには特任・常勤教員が9名所属し、職員10名に加えて勤労奨学生20名が所属する組織として機能し、学長・副学長のもとで本センターが置かれていることから、科目の運営、科目内容に関しての意思決定も早く、機動力があることが推察できます。

初年次教育学会では、2019年に第1回初年次教育学会教育実践賞を公募し、その選定をいたしました。「独創性」「適切性」「有効性」「汎用性」「有用性」という5つの観点からルーブリック指標を作成し、厳正に審査をいたしました。多数の応募の中から、貴学が応募された取り組み名「教職学協働で進化する学部学科横断型初年次教育科目「自立と体験1」」が最優秀賞に選定されました。この取り組みは、初年次教育学会のHPに、「最優秀賞に選定された明星大学の取組は、全1年生が受講する「自立と体験」において、学部学科横断型のクラス編成を通して、多様な他者と関わりながら学び、自己理解を深めるとともに、卒業後の将来を見通した大学4年間の学びの計画を立てるものである。また同科目では、学習習慣、主体的な学び方、専門分野の学習に必要な基礎的スキルも同時に育成している。同取組は、9年間の取組の継続性と改善、全学的な組織的取組と浸透度、などの点において、類似の取組を行う大学にとって有益なモデルとなりうる。また、同取組を通して、進級率、離籍率、卒業率、1年在籍率などが継続的に改善していることも高く評価できる。今後の課題として、成果検証のための複合的な評価方法の検討があげられているが、これについては、eポートフォリオの導入も検討されており、さらなる改善が期待される。」という講評がアップされました。

本取り組みに対する評価はこの講評通りであります。 「自立と体験1」を全1年生が履修し、その教育の効果をしっかりと分析し、継続的に改善しながら、他の体験教育科目につなげていくという取り組みを全学的に行ってきたことが高く評価されたと思います。効果検証や継続的な改善は、お送りいただいた資料のなかの学生や教員のインタビューにもあらわれています。

さて、設立10年を迎えたことは、貴学センターは新たな段階へと踏み出されていく時期でもあると言い換えられるかもしれません。この間、COVID-19の拡大により、日本の大学のほとんどは、2020年前期はオンライン授業を実施してきました。貴学においても、新入生のための初年次教育である一連の科目もオンライン授業として提供されてきたと伺っております。新入生の為の初年次教育のオンライン授業は、他の科目とはまた違った困難性があることは様々な調査結果に示されています。特に、人間関係が構築されていない段階での新入生の帰属意識や絆をどうつないでいくかは、全ての大学の課題ともいえるでしょう。それらは、従来は対面型の授業を通じて、形成、構築されてきたからでもあります。しかし、オンライン授業の経験や知見から、それらを前向きにとらえて、オンライン授業による初年次教育や体験授業の内容の開発を進めていくことは可能ではないでしょうか。

今までの貴学センターのあゆみを拝見しておりますと、経験から得られた知見から新たなステップへとつなげていくノウハウは十分に備えておられると確信しております。初年次教育や体験教育のオンラインプログラムの開発の進展を期待しております。近い将来、新たな活動記録をご教示いただくことを心より期待して、筆を置くことにいたします。貴学センターの設立10周年、本当におめでとうございます。

山田礼子（やまだ・れいこ）同志社大学社会学部 教授 教育社会学、高等教育、初年次教育

初年次教育学会初代会長。明星教育センター開設前の明星大学全学FD研修会（2009年7月8日）で、「初年次教育の意義とそのあり方」をテーマに講演。